

---

# 四泊五日グルメな子猫ちゃん体験ツアー

AQ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

四泊五日グルメな子猫ちゃん体験ツアー

### 【Nコード】

N0481Z

### 【作者名】

AQ

### 【あらすじ】

大学二年の夏休み。彼女のヒロミと喧嘩して引きこもる、ヘタレ男子・ヒデキ。  
生意気な飼い猫ゴローを世話する彼に、突然の悲劇が……！  
笑って泣けるギャグ猫コメデイです。

一部猫の生態描写（シモ系・病気）あり。苦手な方はご注意を……。

## くグルメ猫・その1

一日目・昼。

『ずっと、疑ってたんだ……?』

『いや、それはその……』

『分かった! もうイイツ!』

『ちよっ、待てよっ!』

「博美っ!」

叫んだ自分の声に驚き、目が覚めた。

次の瞬間、頬に横殴りのパンチが浴びせられ、俺は我にかえる。ここは自宅リビングのソファだ。転寝していた俺の目の前にはゴローが居て、何度もしつこくパンチを食らわせてくる。俺の鼻先を狙い、時には爪を立てる……一匹の子猫が。

「ニヤアー」

「夢だったのか……いや、夢じゃないよな……」

「ニヤウアー」

「ああ、分かったよ。ご飯だろっ?」

「フニヤーツ!」

普段は名前を呼んだところで無視するゴローが、『ご飯』の一言に反応し、リビング隅の餌タッパーへすっ飛んで行った。寝ぼけ眼をこすり、ついでに口の端から垂れていたヨダレを拭いながら、俺は興奮して細長い尻尾をくねくねさせるゴローに近づいていく。タッパーを開け、取り皿へ一食分をザラリと入れるそのスプーンを押し退けるように、ゴローが鼻面を突っ込んできた。

リビングの柱時計を見上げると、もうとっくに昼を過ぎていた。

ゴローが腹を空かせるわけだ。

若干一才三ヶ月にして『ご飯』という言葉を覚えたゴローは、かなりグルメな子猫だ。得意技は『猫またぎ』……猫もまたいで通り過ぎるくらい不味い食べ物ということわざだが、激安カリカリと高級カリカリの味の差を瞬時に察知し、安い餌は二オイも嗅がずにスルーする。

その一方で、美味しいご飯をくれる人物も記憶できるらしく、たまに高級ネコ缶を手土産にうちを訪れる博美には「ミャアー」と甘えた声で鳴いて擦り寄る、見事な猫かぶり技術。

しかし、彼女がこの部屋を訪れなくなって早三日……ゴローのピンポン玉サイズな脳ミソからは、既に博美の存在は消えてしまったかもしれない。

俺の心からも、いつそ消えてくれたら楽になれるのに。

「ゴロー、俺の恋人はお前だけだよ……男同士だし、種族も違うけどいいよな？」

「フシャーッ！」

俺が抱き上げようとすると、ゴローは身をよじって俺の手を振り解いた。尻尾をパンパンに膨らませて俺を見上げると、フンツと鼻を鳴らし再びカリカリの残りへと向かう。

俺の愛は、カリカリに到底及ばないらしい。

\*

美味そうに舌なめずりするゴローを見ていて、少し食欲が湧いてきた俺は、冷蔵庫や食器棚を漁りレトルトカレーを発掘。既に賞味期限は切れていたが、買いい物に出かける意欲もないのでそれを食べることにした。片手鍋に湯を沸かしカレーを温める間に、冷凍してあった一食分の米をレンジにかける。

「しかし、今日も暑いなー」

ガスコンロ奥の窓を開けてみるものの、体感温度は一切は変わら

ず、むしろ蝉の声が暑苦しい。

俺が住むこの家は一応実家なのだが、現在父親は九州へ単身赴任中。母親はそつちに入りびたりで年末くらいしか戻ってこない。年の離れた姉はとっくに嫁いでしまった。よって俺は、古い一戸建てに一人暮らした。

博美は「このレトロ感が落ち着くよ」と褒めてくれたが、俺は今時クーラーも無いこの家に不満たっぷりだ。しかし、そろそろ築四十年を迎える、スカスカで密閉性の低すぎるこの家にそんなものをつけるのは『猫に小判』という母の主張も、確かに的を射ている。

とはいえ、暑いものは暑い。「自分は親父のマンションで快適な生活をしているくせに……」と、先日電話で嫌味を言ってみたとこる、「欲しいなら、あんたのバイト代で買いなさい」と切り返されてしまった。

大学生は立派な大人だという母のポリシーにより、俺は仕送りをもらっていない。時給九百円のカラオケボックスでバイトをし、生活をやりくりしている。食費や光熱費はもちろん、学校で必要な教材、サークルの活動費、ケータイ代、猫の餌、なにより博美とのデート代……試験が終わった日、“自分へのご褒美”に一枚千円の古着Tシャツを買ったのがささやかな贅沢だった。

「博美は、俺のこと考えてくれてたのにな……」  
良く手料理を作ってくれたのは、俺の家計と栄養状態を心配したからだ。博美の作ってくれるカレーは、本当に美味かった。

俺は、具の見えない安物レトルトカレーを皿に盛り付けながら、ため息をついた。

大学に入学してすぐ、適当に選んだイベントサークル。そこに博美が居た。

「あのう……猫って、お好きですか？」

名前も名乗らず放たれた第一声に、俺は何だコイツと思いつつも「好きだけど？」と返事をした。

すると博美は「実家ですか?」「ご家族は?」「家にペットは?」  
と矢継ぎ早に質問を重ね、最後は「これはもう、一匹飼うしかない  
ですね! イイ子がいるんですよ!」と飲み屋街のポン引きのよう  
にニヤリと笑った。

つまりゴローは、もともと博美の家の猫だった。飼っていたメス  
猫に子どもが生まれたため、引き取り手を捜していたのだ。

猫は好きだし、母親も「世話ができるならいいわよ」と言ってく  
れたので、人助け感覚で譲り受けたのが去年の春。子猫の中で一番  
貧弱だったゴローを心配して、博美は良くうち遊びに来るように  
なった。最初はサークル仲間で誘い合わせていたのが、夏休みに入  
る直前に「ねえ、今度は一人で遊びに行つていい?」とほんのり赤  
い顔で囁かれたとき、俺は両思いを確信した。

博美の家は大学から遠く、この家に入り浸るのにそう時間はかか  
らなかった。

まだ手乗りのチビ猫だったゴローが足元にじゃれつくのを、キッ  
チンに立った博美があしらいながら、「もー、ゴロちゃんあっち行  
つてなさいっ! 今包丁使ってるんですからねっ」と真剣に話しか  
ける横顔が可愛かった。もし博美と結婚して子どもが出来たら……  
なんて甘い妄想を抱きながら、俺はエプロン姿の博美の後姿を見つ  
めていた。

一年ほど、周囲が羨むのを通り越して呆れるほど順調な交際が続  
いていたのに……。

ちょうど三日前に、初めてのケンカをした。

軽く意固地になった俺は、電話もメールもシャットアウト。バイ  
ト先にも「夏風邪をこじらせたのでしばらく休みます」と嘘を告げ、  
その後家から一步も出ず、抜け殻のように過ごしている。

「はあー……博美、今頃何してんだろーな……」

開いた窓の向こうに目をやれば、もさもさと生い茂る雑草の緑。

猫の額ほどの庭は、現在荒れ放題で目も当てられない。博美は「

夏休み入ったらお庭掃除して、バーベキューしようね」と言っていた。夜は外の方が涼しいし、それもいいなと俺は頷いた。それなのに。

料理も掃除も、一人じゃ何にもやる気が起きない。

「ニヤアー」

「ご飯を食べ終えたゴローがキッチンに駆け込み、俺のふくらはぎに体を擦り付けて来た。もっと寄せせという合図だ。

涙ぐんだ俺が、温もりを求めて抱き上げようとすると、「フーツ！」と叫んで爪を立てる。

「あつそ。そういう生意気な態度取るなら、お代わりなんてやらねーよっ」

子どものように拗ねた俺は、カレー皿を持ってリビングのテーブルについた。ずいぶん体も大きくなったゴローは、テーブルの上へ軽やかに飛び乗ると、フンフンと鼻を鳴らしながらカレーに近づいてくる。

「おいおい、これはお前の飯じゃねーぞ？」

「ンナー」

分かっていると聞いたげに一鳴きし、ゴローはその場に尻餅をつくと、後ろ足で耳の裏を掻きむしった。

『カツカツカツカツ！』

「うわっ、バカヤロ！」

扇風機の風に乗る、抜けた毛束がふわりとカレーへ移る。

慌てて皿を持ち上げ避難させた俺は、なんら悪びれずにテーブルへ寝そべる茶色い塊を睨みつけた。

「てめー……後で風呂に入れてやるっ」

ゴローは『ご飯』以外の言葉は分からないため、俺の脅しにもひるまず、ふてぶてしく尻尾をパタパタと振っている。

猫の毛が春から夏にかけて抜けやすくなることも、風呂が大嫌いなことも、噛み付かれると案外痛いことも、全部博美が教えてくれた。こうして尻尾をパタパタせわしなく動かすのは「バトルモード

だね。猫じゃらしで遊んであげると喜ぶよ」と言っていたっけ……。  
「あーもう、俺は女々しすぎるっ！ さっきから博美のことばっか  
考えて……ちくしょー」

食い終わったらめいっぱい遊んでやろうと思いつながら、俺は猫毛  
を適当に取り除いたカレーをかき込んだ。少し温くなってしまった  
から、その分一気に食べることができた。

普通に、美味かった。

普通……のはずだった。

それなのに、食べ終えた俺の頭はぼんやりし、皿の上にスプーン  
を落としていた。

『ボーン……ボーン……』

柱時計がのんびりと二つ鐘を打ち鳴らす。その音が、なぜか耳の  
奥で何重にも反復して聞こえる。

視界も一気に変わる。見えていたはずの木目のテーブル、白いカ  
レー皿、銀のスプーン、その脇に寝そべるゴロー。全てが消え失せ、  
代わりに見えたのは……。

「床……」

俺は、確かに椅子の上に居る。

なのに、見えているのは『テーブルの下の世界』だった。

「なっ……なんじゃこりゃ！」

俺の脳裏に、有名な漫画がいくつも思い浮かぶ。

黒ずくめの悪者に妙な薬を飲まされ、子どもになってしまった自  
称探偵の高校生。赤いキャンディーや青いキャンディーを飲み分け  
ることで、伸縮自在になる女の子。恋人が突然手のひらサイズにな  
ってしまうという、悲しきラブストーリー。

俺の体は、縮んでいた。

しかし、体に痛みなどはない。視界はクリアだし、耳から聴こえ  
る音も鮮明過ぎるほどだ。ただ、耳の裏が異常にかゆい。俺はその  
かゆみに耐えられず、思い切り掻きむしった。

『カッカッカッカッカッ！』

どこかで聴いた音がする。

どこかで見たふわふわしたモノが目の前を飛んでいく。

俺は安っぽいテーブルの天板裏面を見上げた。

見たくない。自分の姿は見たくないっ…………。

「ふーん。人間の体って面白いね」

聴こえたのは、俺の声じゃない。だって俺は口を開いていないから。でもここには、俺以外の人間は居ないはず…………。

ガクガク震える俺は、神の手ならぬ俺の手でひょいっと持ち上げられた。慌てて目の前の古着Ｔシャツにしがみつくと、俺の指から鋭い爪がニョキツと伸び、自動的に布地へ食い込んだ。

「ヒデキ君、キミはこのＴシャツを気に入ってたんじゃないの？

そんな風に爪を立てたら、穴が開いちゃうよ？」

俺の頭の上から話しかけてきたのは、確かに俺だった。

俺はそのときようやく、自分にピッタリのファンタジー作品を思い出していた。

「俺がゴローで、ゴローが俺で…………」

震えながら、俺は…………失禁した。

## 「グルメ猫・その1」(後書き)

解説&作者の言い訳(痛いかも?)です。読みたくない方は、素早くスクロールを。

この話は個人的お気に入り作なのですが、何がイイって、猫ですよ！ 猫は正義！ 「あまりにも猫キャラが強烈で、ストーリーが霞む」なんてご評価をいただくくらい猫フルな話です。もちろん、猫を飼っていない方にもハウツー的に楽しめる内容になっていると思います。今回の見どころは、ズバリ『柱時計の音』でしょう。ボイン×2って……というのはさておき、超ベタベタ王道な入れ替わりですね。ここで「うへー、ベタ過ぎる」と思ってバックしてしまおう方がいるのではと心配になるくらいベタ。でもこの先に数々のシモギャグトラップと、さらに先にはちよっぴり感動な展開が待っていますので、どうぞお楽しみに。

## くグルメ猫・その2

### 2・一日目・昼。（後編）

目の前には、パンツ一丁の俺……の姿をしたゴローが居る。

俺はといえば、濡れネズミならぬ濡れネコとなって、相変わらずブルブル震えていた。

なんとという恐怖体験……風呂とは、あれほどまでに恐ろしい場所だったとは！

「あー、お風呂ってあんなに気持ちいいものだったんだねっ」

満足気に目を細めるゴローを、俺は唸り声とともに睨みつけた。

常に動じない……悪く言えばオッサン臭いと周囲から評される俺にしても、この状況はショッキング過ぎる。気を抜くと、また漏らしてしまいそうだ。

ピンポン玉サイズに変わった脳ミソを必死でフル稼働させ、俺は一つの結論を導き出した。

そう、きっとこれは夢なのだ。

リアル世界の俺は、カピカピに乾いたカレー皿の脇に突っ伏し、テールに涎を垂らしながら転寝しているはずだ。最近眠りが浅かったから、疲れが出たに違いない。

しかし夢の中で猫になるなんて、俺の脳ミソにも案外ファンタジックな妄想が詰まっていたものだ。

「まあ、ヒゲキ君がどう理解しようとするだけどさー」

猫っ毛でもつれやすい俺の髪をわしわしとバスタオルでこすったゴローは、そのタオルで猫の俺を包み、同じように乱暴に擦りあげる。

「おいつ、ゴロー、痛いって！ もっと優しくっ！ あ、ヒゲがもげたっ！」

「キミがいつもボクにしてくる時はもっと乱暴だよ。はい、おしま

い。あとは毛づくろいで乾かして」

ゴローは二人分の水滴を吸ったバスタオルを軽くはたくと、ソファの背もたれに広げてかけた。飛び散った猫毛は粘着コロコロで掃除し始める。俺には無い、まさに猫らしい几帳面さだ。

俺はといえば、“毛づくろい”という言葉を聞いて、ぷくつと尻尾を太くし固まっていた。

実はさつきから、ある欲求に苛まれていたのだ。

この、濡れた体が気持ち悪い。ざっくりタオルで拭いてもらっただけでは、物足りない。

舐めたい……。

舐め……。

「くそう、俺は人間だっ！ なめんなよっ！」

俺はソファの上から華麗に飛び去り、猫パンチで扇風機の角度を下向きに変えた。一度ソファに戻ると、口にバスタオルを咥えて風の当たる場所へ行き、床に置いたバスタオルの上を転げまわりながら、自分の体を少しずつ乾かしていく。

そんな俺の行動を見て、ゴローは鼻で笑った。

「ははっ、ヒデキ君はバカだなあ。舌で己の体を舐める気持ちよさを否定するなんて。そう、それはキミが毎晩布団の中で行っつい」

「それ以上言うな！」

俺は羞恥心で真っ赤に……なる代わりに、グーの形に固定された手で顔を何度もこすった。

ヤバイと思ったときは、もう遅かった。動揺のあまり、自動的にチラリと舌が出てしまった。

しっとり濡れた自分の腕に、ざらつくサンドペーパーのような舌が触れたとき……。

「 にははうっ！」

ピリピリと、自分の体に電気が走る。

なんとということでしょう……。

自分の中の、まだ押されていない快樂のツボをグリツとされたよ

うな……。

「ほらほら、遠慮しないでもつと舐めていいんだよ？」

ゴローのドS風味なからかいても俺の猫耳には入らず、夢中で何度も舌を出し続けた俺は、完璧な舐め猫になっていた。

\*

夕方になり、辺りが薄暗くなってくると、俺の体をしたゴローはそわそわし始めた。

「ねえ、ヒデキ君。だんだん目が見えなくなってきたんだけど……」

「当たり前だろ。暗いんだったら電気つけるよ」

「あ、そっか。人間は行灯あんどんの代わりに電気を使うようになったんだっけ」

「行灯って……良くそんな言葉知ってるなあ」

俺のツツコミに「良くぞ聞いてくれました！」と膝を打ち、ゴローは立ち上がった。

「実はボクの家系って、いわゆる“猫又”の血筋なんだよね」

「猫又って、古典なんかに出てくる、あの？」

「そう、二十年生きた猫だけがなれるという、伝説の勇者……」

俺の頭脳を使っているせいか、ところどころ語彙がおかしくなりつつ、ゴローは語った。

「ボクはまだ子どもだけど、将来は立派な猫又になりたいと思ってるんだ。今はその修行中」

「へえ、そりゃ大変だ」

どうせ夢の中の出来事だからと生返事をする俺に、ゴローが不機嫌そうに眉根を寄せる。自分の姿を見て思うのも微妙だが、こういう不遜な表情がなんとも憎たらしい……。

貧弱な体とメンタルのくせに、俺はこうしてすぐ虚勢を張るのだから、博美にもすぐ謝れなかった……。

ふにゃーとため息を漏らした俺に、若干口調をやわらげたゴロー

が話しかけてくる。

「まあ、ヒデキ君には信じられないかもしれないけど、これは本当の話だよ。猫又になるための試練の一つが“人間と入れ替わる”ことなんだ。ここで挫折する猫は多いし、この若さで成功したボクは優秀なんだよ」

「へえ、そりゃ良かったな」

「なんかバカにしてるっぽいけど、けっこう大変だったんだよ？

この一年キミに……ううん、なんでもない」

言いかけて止められると、非常に気持ちが悪い。

俺は、好奇心にかられて尋ねた。

「なんだよ、俺に何かしたってのか？」

「うーん、聞かない方がいいかもよ」

「どうせ夢なんだ。かまいやしねーよ」

「じゃあ言うけど……人間と入れ替わるためには“ボクの体の一部”を一定量食べて、同化してもらわなきゃいけないんだよね」

「体の一部……？」

俺は思わず、自分が寝そべっているバスタオルを見つめた。散々転げ回ったせいで大量の抜け毛がくっついていて、首振りする扇風機の風が吹き付けるたびに、何本かが綿帽子のようにふわりと浮かんで飛んでいく。

「……そーいやお前、俺が飯食つてるときに限ってテーブル乗って、体掻いてやがったなあ」

「あ、気付いてたんだ。さすがヒデキ君」

青黒い無精ひげをザリザリとさすりながら、ゴローは俺に得意げな笑みを向けてきた。

「猫と人間が入れ替わる条件は、お互いの相性もあるんだけど、基本は“ヒゲなら一本、毛なら五百本”なんだ。今日はちょうど記念すべき五百本目。おめでとうっ」

どこかで聞いたようなフレーズに、俺は子どもの頃良く食べたチョコ菓子を思い浮かべる。

いや、問題はそこじゃない……。

「俺は、お前の毛を五百本も食べたってことか！」

「うん。一日三本ペースで、一年弱。早かったねえ。さすがヒデキ君。前のターゲツ……ご主人様だったヒロミの家では、ボクも小さかったし、なによりしつけが厳しくて人間の食べ物には近寄らせてもらえなかった。その点ヒデキ君はおおらかで助かったよ」

明らかに褒め殺しと分かる台詞に、俺はイライラが募り、耳の後ろをカカカと掻いた。

その間も、ゴローは夢見るようにぼんやりと俺を見つめながら語り続ける。

「ボクは猫年齢で一才三ヶ月だけど、人間に換算するとちょうどヒデキ君と同じ年くらいかな。ママはボクの体を心配してたけど、だいぶ足腰もしっかりしてきたし、今のところ健康優良児。これも全部ヒデキ君のおかげだし、こうして猫又修行にも協力してくれて感謝してるよ。まあ、ヒデキ君はその体で猫の生活を楽しんでよ。あ、試練の日程は四泊五日だからよろしく！」

なんともリアルな話っぷりに、俺は自分の体を見つめなおした。

茶色に白地が混じる、雑種猫にありがちな体毛。やけに敏感な耳と、複雑な家の二オイを察知する鼻、そして床を押すとぷにぷに弾力のある肉球。

「おい、これは夢なんだろう……？」

「五日経ったらボクたちは元通りになる。ちょっと長めの夢だと思ってくれたらいいよ」

ゴローは、猫のように目を細めて笑った。

「今すぐ、戻すことはできないのか？」

「まあ、できなくも無いけど……失敗すると大変かも」

「一応聞かせろよ」

「ボクが今の体で、キミのヒゲか毛を飲んで条件クリアすれば、もう一回入れ替われると思う。でもママに聞いた話だと、失敗したらこんな風に入れ替わるだけじゃなくて、体も混ざっちゃうらし

い。特に端っこにある部分……耳と尻尾が危ないって」

チラリ、と俺は俺の姿を見上げる。不細工ではないが決して可愛くは無い……むしろ小汚い、仏頂面の男がいた。

そこに、猫耳としっぽをつけた姿をイメージしてみると……。

キモイ！ キモ過ぎる！

そんな姿になったら、もう秋葉原でしか生きて行けない！

その後、俺はゴローが「ハゲちゃうから勘弁してっ！」と泣きを入れるまで、耳の裏を掻いた。

## くグルメ猫・その2く（後書き）

解説&作者の言い訳（痛いかも？）です。読みたくない方は、素早くスクロールを。

猫生活最初のトライは、お風呂でございました。まだ序盤だというのに、既にヘンタイ風が爽やかに吹き始めております。ヒデキ君が布団の中で何をしているかといえば、いわゆるオ……ゲフンゲフン。分からない方は、ちょっと年上のお兄さんに訪ねてみましょうね。（この話は全年齢向けです。自重自重）さて、今回は猫又変身の条件について、アバウトな解説編でした。もちろんフィクションです。猫飼いさんたちは、猫毛をそれくらい食べるかもしれないってのはノンフィクションですが。猫毛を一日三本程度飲みこんだところで、人間のお腹にヘアボールなどはできませんのでご安心を。食物繊維と同じく、消化されずにあそこから出て行くそうです。舐め猫は、知らない人居ないよね？ あれ最強に可愛いですよねっ！うちにグッズが一個だけ残ってて、ときどき眺めてニヤニヤします。なめんなよ生徒手帳。はあはあ。

今回は、ヒデキ君の猫生活一日目の夜。ついにタイトルの通り『  
グルメ』の話に入っていきます。腹ペコなヒデキ君の目の前に、キ  
ャットフードが差し出されて……こつこ期待。

## くグルメ猫・その3

### 3・一日目・夜。

昼にカレーを食べた俺（今はゴロー）も、ドライフードを食べたゴロー（今は俺）も、さすがに腹が減ってきた。

ゴローは、いつも俺がするようにタッパーを開け、ドライフードをスプーンでひとすくいして小皿に移す。水を代えてくれている間に、俺はふらふらとその餌に吸い寄せられていった。

一度、手の先でツンツンとつついてみる。小さな三角形の固い粒が、焦茶色・レンガ色・緑色の三色。ときおり混じる純白の丸い粒は、『お肉とお魚&野菜（ミルク粒入り）』という商品名の通りだ。見た目はこんなに不味そうなのに、なんとという芳しい香り……涎が口の中にじゃぶじゃぶ溜まっていく。

「ほら、早く“ご飯”食べなよ」

『ご飯』

そのキーワードに、俺の猫スイッチが入った。

「うにゃあつ！」

歓喜の声を上げ、俺はその固いポリポリしたものに鼻を押し当て、本能の赴くままにむさぼりついた。

美味しい……なんて美味いんだ！ 噛み締めるほどに口腔内から鼻へと充滿するこの香り！ お肉、お魚、野菜……三つのハーモニーにマイルドさをかもし出すミルク粒のアクセントがたまらん！

俺がカリカリを食べるのに夢中になっている間、ゴローは冷蔵庫を物色していた。チャリツという特徴的なその音と、鼻腔をくすぐる強烈な香りを感じたとき……俺は目の前のご馳走を放り出し、ゴローの元へ駆け寄っていた。

「何食おうとしてる、てめーっ！」

「っふふふ。ずっとこれを食べてみたいと思ってたんだよねっ」

ゴローが手にしていたのは、正方形の薄い板状のモノ。人間の俺がラッピングされたシートを剥がすたびに、興奮したゴローがニヤンニヤンと足元にまとわりついてきた、アレだ。

猫の俺は、ゴローの向こう脛に爪を立てながら抗議した。

「それを俺にも食わせろっ！」

「ほほう……これがチーズ。なんとも濃厚でクリーミー、塩味がきいている」

「おーれーにーもー！」

「ダメだよヒデキ君。猫は塩分を取りすぎると病気になっちゃうからね」

「せめて、そのフィルム部分だけでも舐めさせて！」

願いも空しく、フィルムは蓋のついたゴミ箱へひらりと消えた。

ニオイが無くなると同時に、俺の欲求も萎む。すごすごとカリカリ前へ戻る俺に、やけに力無いゴローの声が届いた。

「ヒデキ君、なんだかボク、力が出ないよう……これだけじゃ腹の虫がおさまらないんだけど」

「当たり前だろ、スライスチーズ一枚じゃ……ていうか、その慣用句間違ってるし」

「あのさー、聞いてくれる？ ボク人間になったら叶えたい夢があるって」

「何だよいきなり」

「グルメ……」

俺の第六感が、嫌な展開を予測する。尻尾がしゅるつと股の間に入り、また耳の裏がかゆくなってきた。本当にハゲたら可哀想だから耳を掻くのは我慢し、代わりに腕や足を舐めて心を落ち着かせる。「人間の舌は、猫よりも複雑なんだってね。しかも、味覚は五つもあるとか」

甘味、酸味、塩味、苦味、旨味。

俺が過去に学んだ雑学を、複雑極まりない人間様の脳ミソから引っ張り出しつつ、ゴローはニヤリと笑った。

「この五日間で、五つの味覚を堪能する……うん、素晴らしい目標だ。人間とは自ら目標を立て、自己実現の達成に向かう生き物である」

「ちよつと待て」

「ヒデキ君も、猫の味覚を愉しんでみたいだね。さて、人間の世界は“お金”というものがあれば何でも手に入る、と……」

俺の鞆から財布をまさぐるゴローに飛び掛った俺は、懇願した。

「やめてくれっ、俺の小遣い……夏休み博美とデートしようと思っ  
て溜めてたのにー！」

「いいじゃん、ちよつとくらい。可愛い飼い猫には旅をさせるとい  
うし。それにヒロミとはもうサヨナラしたんでしょ？」

「間違ってる！ いろんなことがっ！」

ゴローは財布をジューパンのポケットにねじ込むと、キッチンの食  
器棚の引き出しからあるモノを取り出した。

それは俺がゴローの爪を切って怒らせた後に、必ず与えるもの。

「お詫びに、キミにもこれをあげるから、ね？」

ゴローは躊躇せず、その小袋を開けた。

「フニヤアアアッ！」

マタタビ……酒もタバコも苦手な俺にとって、それは初めて経験  
する悪魔の粉だった。

何度も床を転がり、柱の角に体をこすりつけながら、俺は「せめ  
て食費は一日千円以内で……」と壊れたレコーダーのように呟き続  
けた。

\*

俺がマタタビで夢の世界を旅行中、コンビニへ出かけたゴローは、  
意外とあっさり帰ってきた。なんでも、暗い中を歩くことや車のク

ラクシヨンが怖かったらしい。

一方俺の方は、電気もつかない暗がりでも快適だ。何かにぶつかりそうになればヒゲがぴくりと動いて、危険察知のセンサーになってくれる。

「ところで、何買ってきたんだよ？」

ようやくまたたびが抜け、正常な思考を取り戻した俺がテーブルに飛び乗ると、ゴローはレジ袋を俺の前に置いた。うっすら透き通るその袋の中に、俺は大好物を発見する。

「こ、これは……」

「うん、菓子パンとアイスだよ。一日目は“甘み”を堪能するんだっ」

俺は涙を流す代わりに、スンスンと鼻を鳴らしながら腹の毛を舐めた。菓子パンもアイスも、特別良いことがあったときのご褒美にしていた。いつもはスーパードで一斤百円の食パンを買い、同じく一個百円のジャムをつけてごまかしているのに。アイスなんて贅沢品はもう何日食べていないか……水道水の自家製力キ氷で我慢しろっちゅーねん……。

「なんとなく美味しそうだなーと思ったものを選んだけど、これはヒデキ君の記憶にあったからなんだね。しかし、甘みって癖になるねえ。止まらないや」

白い砂糖がかかったうずまき状のデニツシュ。表面がツヤツヤしたアップルパイ。本物のメロン果汁が入ったメロンパン。

そして、あのアイス……。百円のラクトアイスならまだしも、俺が食べたたくても手が出ないと涙を吞んでいた二百五十円の高級アイスクリーム、しかも期間限定リッチミルク味……。

「そんなに恨みがましい目で見ないでよ。ヒデキ君にも一口あげるからさ」

デニツシュ生地のはらりと剥がれ落ちた皮が、アイスの蓋と共に目の前に差し出された。人間思考の俺はそこに飛びつきたいのに、猫という名の戦うボディが邪魔をする。

嫌がる猫本能をなんとか押さえつけ、俺はそこに舌を伸ばした。デニツシユ皮を舌ですくい、くちやくちやと噛み締めてみる。次に、溶けて液体状になったアイスのミルクをぺろり。

「……味、しねーし」

さっきのカリカリと比較するなら、百点満点の十点。

猫背になつてうつむく俺を尻目に、パンとアイスで腹を満たしたゴローは満足気に舌なめずりすると、突然びくんと体を震わせた。

「おおつ、なんかもよおしてきたよつ。人間の体って不思議なくみだねえ。食べたらすぐそれが出てくるんだから」

ゴローにそう言われて、俺も思い出したように下腹部を気にする。さつき食べたカリカリは確実に消化中。しかし腸の奥にまだ固いものが残り、手前まではあと一押し足りない。

「俺、ちよつと走つてくるっ！」

とりあえず、十四畳のリビングを端から端まで三往復ダツシユしてみた。イイ感じにアレが盛り上がってきたそのタイミングで、俺は玄関先にあるトイレにまたがった。

『ムリムリムリッ……ムリッ』

フニヤウーと息を吐きながらお尻をピクピクさせた俺は、ツーンと立ち上る香ばしいその二オイが鼻につき、顔をしかめた。人間の俺が感じるよりよほど不快だ。

ていうか、なんだか猛烈に恥ずかしいっ！早くそれを隠したいっ！

俺はできる限りこんもり砂をかけると、そろそろと猫足でそこを離れた。トイレから出て来たゴローが「ねえ、人間のアソコって……」と話しかけてくるのを遮り、俺は叫んだ。

「ゴロー、トイレのアレ、早く始末してくれよっ！」

「了解。じゃあヒデキ君も、ソコをきちんと始末しておいてね」

そのとき俺は、猫の勘で察した。ゴローが始末しろと命じたのは、俺の……さつきアレが出て来たソノ部分。背中を床につけ、体を思いつきり猫背に曲げてみると、小さな蕾みにアレのカケラがついて

いるのが見える。

ま、まさか……。

俺は信じられずにブルブルと頭を振りつつも、そこから視線を逸らせない。猫本能により、吸い寄せられるようにその場所へ舌が伸びていく。

アレを、早く取り除きたい。

「おい、ゴロー……濡れタオルでぬぐってくれよ……」

喘ぎながら必死で伝えた言葉は、この非情な男には届かなかつた。

「大丈夫だよ、猫の舌だと“苦味”って味覚は薄いから」

さて、もう一回シャワー浴びて来よつと言いつつ、ゴローはその場を立ち去った。

一人にしてくれたのは、武士の情けなのだろうか。

ああ……もう逆らえない……。

舐めたい……。

俺はこの日、人として大事なモノを失くした。

## くグルメ猫・その3く（後書き）

解説&作者の言い訳（痛いかも？）です。読みたくない方は、素早くスクロールを。

今回は、そーとーお下品な話でした。申し訳ありません……でも、猫の気持ちになってもらえたはずです。アレとこつち、食べるならどつちがい……ゴホン。では一点補足を。トイレから出てきたゴローが言いたかったこと……はスルーしまして、真面目な話をば。猫にとつてカリカリの色は識別できません。分かりやすさのために、そこだけフィクションにしてあります。そこだけ……はい嘘です。ツーンな匂いが恥ずかしいとか、あつちこつちにフィクションがございます。でもチーズやマタタビの話も含め、基本は猫の生態をリサーチして書いております。そして今回ようやくグルメの話になりました。実はこの話を書く際に『5』というお題が決められていたので、5つの味覚を5日間という設定になりました。ちなみにゴローが食べていた菓子パン&アイスは、全て作者が愛している物です。本当は『ナイススティック』が一番好きなのですが、地味過ぎ

て描写が難しかったです。それこそ細長い……ゴホン。他にも小ネタが散りばめてありますので、見つけたらニヤツとしてください。

今回は、二日目三日目と一気に進みます。グルメネタ中心で、あまりお下品にはなりませんのでご安心くださいませ。

## くグルメ猫・その4

### 4・二日目。

翌朝目が覚めると、俺はまだ猫ボディの中だった。

「おはよう、寝坊助なヒデキ君。もうお昼だよ。今日も良い天気だねっ」

「……なんで、俺はまだ猫なんだ？」

寝惚けまなこを肉球でこする俺に、ヒト型の俺……ゴローが声をかけてくる。

「いやだなあ、昨日説明したでしょ。さすが猫の脳みそはピンポン玉サイズ。すぐ忘れちゃうんだから。ヒデキ君が猫生活を楽しめるのは、四泊五日。あと四日だよ」

と、柱時計の下に貼ったカレンダーを指差すゴロー。タイミング良く『ボーン……』と鳴ったその音色が、俺の記憶を呼び覚ます。昨日の衝撃的な猫ライフで精神的ダメージを受けた俺は、現実逃避と眠さのダブルパンチにより、リビングのソファの上で意識を失うように眠り込んだのだ。

「そうか、あと四日か……意外と長えな」

「たぶんあつという間だよ。さて今日は二日目だから、目標は『酸味』だねっ。ヒデキ君が寝てる間に、テレビを見てたんだ。食べたい物を見つけたから、今からコンビニに行ってくるよ。大人しくお留守番しててね」

「ああ、わかった。余計なモン買うんじゃないぞ？」

「余計なモノって？ 例えばヒデキ君のベッドに置いてあった雑誌……」

「……いいからとつと行って来い！」

ゴローは声を立てて笑うと、俺の頭を一撫でし出かけていった。

俺は慌てて寝室へ駆け込む。枕元に置いてあった雑誌（大人用）を

啞え、ずりずり引きずってベッドの下へ移動させた。ついでにサイドテーブルに置いたノートパソコンを起動し、中にある恥ずかしいリンク集も消去……はできず、奥の奥へ移動させる。

当然、猫の手で行うものだから悪戦苦闘。両手でマウスを動かして、肉球で上手にクリック。もしもビデオカメラがあったなら、可愛い子猫ちゃんがエ サイトを見ているという、オモシロ投稿ビデオが撮れたに違いない。

思いつく限りの証拠隠滅を終えた俺は、精神的疲労のせいか空腹に見舞われた。リビングに戻り、ツンツンと生える猫草を食べてみた。体内の毛玉を排出するための草だけに、味はしないもののそれなりに良い香りがする。

しかし、あと四日のうちに万が一アイツがこの手のことに興味を持ったら……もしくは俺に発情期が到来したら……いや、考えないでおこう。恐ろし過ぎる。

「ただいまー」

「おっ、おう、おかえり」

「少しゆっくりしてきてあげたよ。ちゃんと恥ずかしいモノは隠しておいた？」

全てお見通しのゴローに「ニヤフン！」と言わされた俺は、フンと鼻を鳴らしながら、いつものカリカリを食べた。

ゴローはといえば、昼飯に冷やし中華と、なぜかレモンを一つ買ってきた。まずは、嬉々として冷やし中華を平らげる。

「酸味……これはまた、珍妙な……しかし涼やかで後味の良い、素晴らしい味わいだ！」

「いいなあ、俺冷やし中華大好物なんだよ。一口食べさせてくれよ」

「えー、これを？ やめた方がいいと思うなあ」

「いいからよこせって」

ゴローの忠告も蹴飛ばし、俺は前回のパン&アイスと同じように、猫の舌でその冷やし中華を一口味わった。

「オエー……」

さつき食べたばかりの美味いドライフードが、胃からゴボゴボと上ってきそうな程の不味さだ。まるで腐ったものを食べさせられたかのような……。

「ははっ。ヒデキ君は本当にチャレンジャーだね。猫は酸っぱいモノが一番苦手なんだよ。ニオイ嗅いだら分かるでしょ？」

「うつつ……ぎぼぢわるいっ」

「ついでに、柑橘系のフルーツもダメなんだけどね。今からレモネード作るから、遠くに行つてた方がいいよ」

どうやら午前中の奥様番組でレシピを覚えたらしく、ゴローはハイカラな飲み物をつくり、思う存分酸味を堪能した。絞られるレモンの凄まじい悪臭にやられぐったりした俺に、ゴローはお詫びと称して“またたび”を与え……俺は夢の世界へ旅立った。

夜になると、ゴローは相当気に入ったのか昼と同じ冷やし中華とデザートに酸っぱい味付けのポテトチップを買ってきた。俺は夢つつのままカリカリを食べ、ムリムリツとアレを出して、寝た。

三日目。

ベッドの上で丸くなり眠っていた俺の猫耳に『ゴウンゴウン』という、馴染みの機械音が聞こえてきた。

慌てて飛び起きると、昨日と同じく時間はもうお昼近く。隣で寝ていたはずのゴローはもぬけのカラだ。ふらふらとリビングへ向かった俺は、洗面所にエプロン姿のゴローを発見した。

ゴローの手には濡らした雑巾がある。どうやら今日は、掃除と洗濯をしていたようだ。博美とケンカしてからというもの、掃除どころか洗濯物も溜め放題だったことを、はるか遠い日の出来事のように感じる。

今の俺には、もうあの頃のことなんて考えられない……。

「おはよー、ゴロー。腹減ったー」

一にご飯、二に睡眠。三四が無くて、五にうこ。これが猫頭で考えることのほとんどだ。

「あ、ようやく起きたんだね。おはよう……って、もうお昼か。それにしても、人間の一日は早いなあ」

「早くメシー」

「すぐ買い物行ってくるから少し待ってて。家族なんだから、ご飯くらい一緒に食べなきゃね」

ゴローは俺の口癖を真似すると、エプロンを外していつものコンビニへ買い物へ出かけた。

数分後に帰ってきたゴローは、なぜかやけに興奮していた。

「今日は『塩味』の日だから……ボク、大冒険を試してみたいと思いまっす！」

清水の舞台から飛び降りるつもりで、と小難しい単語を駆使しつつ、ゴローは電気ポットのボタンを長押しした。じよるじよると流れ出る熱湯を受け止めるのは、一つの器だ。『塩バターコーン、ポリウム二倍』とパッケージに書かれている。

「本日の課題は、猫舌克服であります！ しかもっ！」

ゴローは、冷凍庫から俺がストックしている野菜のタッパーを取り出した。

「ネギ！ これは猫にとって禁忌と言っても過言ではない、一口食べれば死に至る悪魔の食料……ふふっ」

猫の生活にだいふ慣れてきた俺は、カリカリを堪能した後テープルに飛び乗った。

今回も試しにラーメンスープ（ネギ投入前）を一口もらい、舐めてみた。湯気のもくもく立つスープは猫ボディがどうしても拒絶するため断念し、小皿で冷ましてもらった。

味としては……正直まったく感じなかったが、昨日の酸味が強烈過ぎたせいかなそれなりに美味く感じる。何より、魚介ダシとバター

の香りが好ましい。猫は味そのものよりニオイ優先……だからこそカリカリもチーズも魅力的に感じるのだと俺は悟った。

ラーメンは二個買ってあった。どうやらゴローは『買いため』というスキルをマスターしたらしい。しかも夜はしょうゆ味で、『ミックス野菜』というもやし中心の野菜パックを炒めて加えていた。

「ヒデキ君っ、ついにボクは火を使いこなせるようになったよっ！」

コンロの前から鼻息を荒くして報告するゴロー。壁際に寝返り打って背中を向け「勝手にしゃがれ」と呟いた俺は、パシパシと瞬きを繰り返す。昨日一昨日とまたたびを食らって興奮状態が続いたせいか、今日は眠くて仕方ない。

「それは“ネコが寝込んだ”というギャグだね？」という、くだらないゴローのボケをスルーしつつ、俺は眠り猫となった。

猫になって分かったことが一つ。猫は寝てばかりいるから羨ましいと思っただけで、本当は眠くて何もできないのが正解なんだ。

真夜中に、ゴローがいびきをかきはじめたり、でかいオナラをしたり、唐突に『ママ』と寝言を言ったり……敏感過ぎる耳が、そんなささいな音にピクツと反応してしまう。

眠りが浅く断続的になってしまふのは苦しいけれど、一日寝ていても怒られない猫はやはり気楽な稼業だと、夜の闇に目を光らせながら俺は思った。

## くグルメ猫・その4（後書き）

解説&作者の言い訳（痛いかも？）です。読みたくない方は、素早くスクロールを。

予告通り、あまりお下品では無いあっさり目の二日間でした。一部お見苦しい個所がございましたが……ゴホン。主人公は健全な男子なのでご容赦を。（ちなみに猫ゴローが発情期だった場合、恐ろしいことになったと思います。R指定必至……でもちよつと書きたいかも。女を落としまくるジゴロなゴロー。苦笑）さてストーリー的には、淡々と過ぎた感じです。猫ヒデキは食べて寝てるだけ、一方人間ゴローは人としての生活を楽しんでいるようです。猫の舌感覚については、猫本で調べた結果なので間違いないと思います。くれぐれもお猫サマに酸っぱいものは食べさせないように……といっても近寄って来ないと思いますが。ネギ系の野菜もNGです。あと昭和ネタの補足を少し。とりあえずこの話に出てくる『ヒデキ・ゴロー・ヒロミ』といえば昭和御三家。しかし作者がもつとも好きなのは、ジユリーなのです！特に『勝手にしやがれ』は名曲ですね。

ということ、猫が寝込む際に小ネタ挿入させていただきました。  
意味は特にありません。

次回ですが、のほほんとした二人の生活に転機が起きます。今まで陰の薄かったあの人が登場です。

## くグルメ猫・その5く

### 5・四日目・昼。

俺の眠たい病は相変わらずで、またもや昼時に目が覚めた。

ゴローは今日もハイテンションで、四日目の課題である『苦味』へのチャレンジを宣言した。

「しかし、苦い食べ物って一体何だろうね……ヒデキ君の大きい割りにシワが少ない脳ミソからは検索できないよ」

「じゃあ、インターネットのヤホーさんにでも聞いてみるよ」

ゴローはなるほど手を打つと、嬉々としてパソコンを立ち上げる。案外スムーズにキーボードを叩き、一つの情報を見つけた。

「これだ！ 夏野菜の定番……“ゴーヤ”！」

「それ、たぶんスーパー行かないと売ってないぞ？」

「よし、勇気を出して初めてのおつかいに行ってくるよ。あっ、迷って戻れなくなったらゴメン」

「 待て、俺も行くっ！」

ハタチを過ぎた大の大人が、迷子で保護されるなんて洒落にならん。そうでなくても、スーパーにはコイツが引っかけりそうな誘惑が多いのに……。

キャリーバッグに入れられ、買い物に付いていった俺は……スーパーの誘惑に負けた。

「まったく、キミは我侷な子猫ちゃんだなあ。はい、戦利品っ」

「あ、ありがとうございます……」

恐るべし、鮮魚コーナー！

あの「さかなさかなさかなー」という軽快なリズムに、つい踊らされてしまったぜっ！

夢中で生魚にむしゃぶりつく俺の隣では、ネットで調べた通りの手順でゴーヤチャンプルーを作るゴロー。

「やっぱりコンビニで済ますより、手料理の方が美味しいし安上がりだね」

人間の俺そっくりな台詞で、自画自賛しつつそれを平らげた後、同じくスーパードで入手したブラックコーヒーと「大人のチョコ」という苦味が強いチョコ菓子をデザートにする。合わせて買ったクリームチーズは、今夜か明日以降のオヤツ用だろう。

「なるほど、苦味とは人間にとっても、ストレートに“美味しい”と感じるものではないらしいな。その苦行に耐えることが大人の証……ゆえに、苦味とは大人の味と称されるのである」

ゴローは文豪気取りで一人ごちながら、俺にぬるくなったコーヒーを差し出す。ゴローとチョコはさすがに無理だった俺は、コーヒーを猫の舌で一舐めし……「同じ苦いなら、トイレの後のアレの方がイケるな」と、悟りを開いた高僧気取りで呟いた。

\*

その後ゴローは、よせばいいのに『缶ビール』に手を出し……ひとしきり興奮してはしゃいだ後、予想通り酔っぱらって、カーペットの上にパタリと倒れた。

すやすやと眠るゴローの肩先で丸くなり、惰眠をむさぼっていた俺に転機が訪れる。

『ピンポーン』

突然鳴ったチャイムに、俺はぴくりと体を震わせ起き上がった。

なんだか、玄関の向こうから懐かしいニオイがする。

俺がタシタシッとゴローの鼻面にパンチを食らわせると、酒臭い息を吐きながらゴローが立ち上がった。目を半開きにし、幽鬼のように揺れながらもなんとか玄関へ辿りつき、ドアを開ける。

と、飛び込んできたのは……博美だった。

さらさらで艶のある黒髪のおかっぱ頭に、ちょっと太めの眉と愛嬌のある垂れ目、ふっくらした頬とあまり高くない鼻、いつも「高

校生どころか中学生に間違えられることもあるんだよつ、失礼しちゃうよね」と文句を呟いていた赤く小さな唇。

ほんの数日会わなかっただけなのに、こんなにも輝いて見えるのは、この猫目のせいか、それともひいき目のせいか……。

夕焼けをバックにうつむく博美に向かって、夕焼けより赤い顔をしたゴローはさらりと言った。

「何か用？」

「バカッ！　ここはゴメンだろう！　許してくれ、俺が悪かった、もうあんなこと言わないでも何でもいいから謝れえっ！」

玄関先で狂ったように鳴き喚く俺を、無表情の博美がふわりと抱きかかえる。

「ごめんね、ゴロちゃん。寂しかったでしょ」

「猫の俺より、人間の俺の方が寂しかったよー！」

「そっかそっか。じゃあ、ちよつとだけ一緒に来てくれる？」

「ちよつとじゃなく、一生一緒に居てくれやー！」

「悪いけど、この中入ってねっ」

「……うにゃっ？」

悲しいことに、博美に俺の言葉は通じず、人間の姿をしたゴローとの会話も一切交わされず。

俺は、博美が抱えてきた籐カゴに詰め込まれ、ゆさゆさと移動させられていた。

#### 四日目・夕方。

電車に揺られること約一時間。埃っぽい都会の二オイから、青臭い田舎の二オイが混じる駅で降り、さらに徒歩数分。到着したのは、どうやら博美の家らしい。

ちよつとそろそろご挨拶にいかねければと思っていたところだが、まさかこんな姿で初訪問することになるうとは……全く残念過ぎる。

ふにゃあと溜息をついたとき、籐カゴの蓋が開いた。微笑む博美が、俺を見おろしてくる。

「疲れたでしょ、ゴメンね。後で美味しいご飯あげるからね」  
マドンナのように優しい博美の声に反応し、俺はランランと目を光らせた。あくまで博美の優しさに感動したせいだ。“ご飯”って言葉のせいじゃないぞっ。

元気を取り戻した俺は、籐カゴの縁に前足を乗せて、周囲の景色を眺めてみた。一階は店舗になっており、『純喫茶 郷』<sup>ふるさと</sup>という色あせた看板に電気が灯されている。俺はご両親と挨拶もせず、そのまま二階に上がらされた。

俺の家より若干手狭なりビングに着くと、ようやく窮屈なカゴから解放される。

そこは、懐かしいニオイに満ち溢れた空間だった。

「ゴロちゃん、覚えてる？ キミはここで生まれたんだよ」

「ああ、なんとなく……でももうほとんど俺のニオイは残ってないみたいだ」

猫本能の赴くままに、俺は家具や柱などに体をすりつけマーキングをしていく。それでもあちこちに気になるニオイがして、俺はどうにも落ち着かず、借りてきた猫状態で部屋の中をうろつろした。

なんだろう……この部屋には、何かが足りないような気がする。

博美はそんな俺を掴まえると、ギョツと胸に掻き抱いた。その力があまりに強くて、俺はとっさに爪を立てる。

「ごめん、ゴロちゃん……痛かった？」

「いや、別に平気だけど……」

せめて人間らしく手を横に振ろうとしたとき、俺の肉球が柔らかいモノ 博美の胸に当たった。ぶにぶにとそれを押すと、なんともいえない甘い記憶が蘇る。

ぶにぶに、ぶにぶに……。

しばらく無心になって押し続けると、博美はなぜか泣き笑いを浮かべて言った。

「やっぱりゴロちゃんも、まだ覚えてるんだね。ここでいつもおっぱい飲んでた、お母さんのこと……」

「お母さん……？」

そつだ。部屋の中に残る微かなニオイは、俺が……いや、ゴローがずっと求めてきたもの。

「もうすぐ、お母さんと合わせてあげるから、待っててね」

何かがおカシイ、と俺はあらためて思った。

博美は単純で、思い込んだら一直線な性格だけれど、こんな風にゴローを拉致するような真似はしない。いつも太陽みたいに明るく笑っていて……あのケンカの日だって涙は見せなかったのに、今は目の縁に涙をたっぷり溜めながら俺を見ている。

不安に震える俺が、博美の白いサマーセーターに爪を立ててしがみついた時、トントンと階段を昇る足音が聞こえた。やってきたのは、博美と良く似た背格好の中年女性だ。少し太めの眉と垂れ下がった目尻も似ている。たぶん母親だろう。

そして、博美母の腕にそっと抱えられた一匹の猫に、俺は心を奪われた。

\*

古いアルバムが捲られるように、俺の記憶は手のひらに乗るくらい小さなゴローに帰っていく。

甘く優しいミルクの香り……俺の体を舐めてくれた舌触り……猫として生き抜く知識、猫又になるといふ夢をくれた、最愛の人の面影……。

ずっとずっと会いたかったのに、どうしてだろう。近づきたいのに、怖い。

なぜなら彼女は、俺には耐えられない強烈な悪臭を放っているから……。

「タマちゃん、ゴロちゃん連れてきてあげたよ。覚えてる？ タマ

ちゃんが産んだ、最後の子だよ」

最後つて、なんだよ。記憶の中の母親は十分若くて、まだ子どもが生めたはずだ。

悪臭に混じって彼女の体から漂う、このスースーするニオイは、病院のニオイ……今さら避妊手術でもしてきたのか？

「なんだよ、これ……」

俺の肉球は、汗びっしょりになっていた。耳の裏が猛烈にかゆい。体がむずむずして舐めまくりたい。

なのに、博美は俺を放そうとしないし、俺も博美の胸にしがみついたまま震えることしかできなかった。

「さあ、タマちゃん。疲れたでしょ。ちょっと横になろっか」

古びた毛布の上に、博美母が“タマ”を寝かせる。四肢をだらりと投げ出し、身じろぎ一つしない茶トラのメス猫は、微かに目を開き鼻をひくつかせた。

「ゴロちゃん……お母さんだつて分かるなら、挨拶してあげて？」

そつと床に降ろされた俺は、恐る恐る毛布の方へと歩み寄った。

気持ちが悪い腐臭は、一昨日食べた冷やし中華と同じ。それなのに、俺はその香りを嗅ぐのを止められなかった。その奥に、求めるものがあるような気がして……。

「お、おい……」

吐き気がするほどの悪臭を我慢し、なんとか近寄って声をかける。腹に白い包帯を巻き、ヒューヒューと荒い呼吸を繰り返すその猫は、微かな声で俺に言った。

「坊や……」

痛みを堪えるような、それでいて温かく優しい声だった。

うるたえた俺は、その場に立ち止まる。

「元氣そつで、良かった……」

なんで今日なんだ？

そんな風に、愛情に満ち溢れた目で見られても、伝わらない。俺には、ゴローの記憶がほんの少ししか引き出せない。

「いいひとに、もらわれたんだね……ケホッ」

「バカッ！ もう喋るな！」

俺はその猫に飛びつくと、必死で顔を舐め始めた。腐臭なんか気にせずに、ただひたすら舐めた。

「ふふ……ありがとう。もう十分よ……」

「なあつ、お前のゴローは俺じゃないんだよつ！」

「分かってるよ……アタシは猫又に、なれなかった……」

「今からでも頑張れよっ！ なあ、明日には本物のゴローに会わせてやるって！」

俺は猫パンチを、やせ細った頬に繰り出した。まったく力が入らないそれは、ゴローを叩き起こした百分の一くらいしか威力が無かった。それでも多少の効果はあったのか、閉じかけた目を薄く開き“タマ”は、夢見るように語り続ける。

「猫は、自分の死を、子どもには見せないもの……でも、どうしても伝えたい、ことがあったの。だから神様に、この日まで命を、永らえるように……お願い、あの子に、伝えて……立派な、猫又に……」

「そんなの本人に直接言えよ……頼むから！」

「皆にも……アタシは、このうちで飼われて、幸せだったって……」

俺はもう何も考えず、気が狂ったように痩せ細った体を舐めた。

彼女も一度だけ、おずおずと熱過ぎる舌を出して、俺の耳の後ろを舐めた。

それを最後に、彼女は二度と目を開くことはなかった。

## くグルメ猫・その5く（後書き）

解説&作者の言い訳（痛いかも？）です。読みたくない方は、素早くスクロールを。

すみません、改稿していたらすっかり予定オーバーです。理由は……。またもや察してください。書きながらもう気持ちが揺れまくりで。ペットロスは、動物を愛する誰もが直面しなければならぬ悲しい運命。この話は起承転結をイメージしながら書いたのですが、転に何を持ってこようかと思ったときに、ここに切り込もうと思いました。コミカルとシリアスの融合を目指したいなあと……でもこれで良かったのかは謎です。書き過ぎると重くなりすぎ、書き足りないで浅くなる……。難しかったです。さて気持ちを切り替えて、今回の猫補足をば。お胸ぶにぶには、猫の可愛いしくさナンバーワンです。赤ちゃんがママのおっぱいを絞るしくさらしいのですが……。ときどき寝ていると肩のあたりをぶにぶにしてくれて、どんな揉み師さんよりええ塩梅です。あとギャグ説明。「一生一緒にく」は大好きな曲から。また博美「マドンナは、某昭和の歌姫さんから、そ

して『純喫茶 郷』がイチオシギャグでした。

次回は、博美の家からの帰り道。どうしてこんなことに……とい  
うあたりを軽く。ラストまであと2話。サクサク進みますっ。

## くグルメ猫・その6

### 6・四日目・夜。

博美は気丈だった。泣き崩れた母親の肩を抱きながら、精一杯の泣き笑いで励まし、その後店のエプロンを手にして一階へ。

俺は博美が心配だったけれど、タマの傍からどうしても離れられなかった。穏やかに眠るタマの横顔を見ていると、一つまた一つとゴローの記憶が鮮明に蘇ってくる。生まれたての身体を舐めてくれた大きく温かい舌。甘いミルクの香り。初めて目が開いたときに見えた、タマの笑顔。兄弟の中で一番貧弱だったゴローが一番早くしゃべり始めたときは、ずいぶん驚いていたっけ。

それからタマは、たくさんのことを教えてくれた。猫社会や人間との付き合い方、そして何より『猫又になる』という夢を与えてくれた。眠る前は必ずその話をせがむ俺に、呆れたように笑いながら何度も語りかけてくれた。

俺は願った。今俺が目になっている安らかな寝顔も、すっかり記憶に焼きつくようにと。明日身体が元に戻ったとき、ゴローがこの記憶を引き出してくれればいい。もしかしたらタマは『恥ずかしいよ』って言うかもしれないけれど。

そんなことを考えながらタマの傍に寄り添っていると、ようやく立ち直った博美の母親が「さ、ゴロちゃんお別れは済んだ？ あんまり悲しんでると、タマが安心して天国行けなくなっちゃうからね」と言い、タマの遺骸を毛布にくるんでどこかへ運んで行った。

母親と入れ替わりで、博美がリビングへやってきた。一人部屋に取り残された俺の様子を見るだけのつもりが、抱き上げた腕に俺が必死でしがみついたものだから、眉をふにゃんと下げて苦笑い。

「しょうがないなあ。一緒にお店来る？ ……うん、ナイスアイデアかも。お客さん皆タマちゃんのファンだったから、きつと喜ぶも

んね」

博美の腕の中で揺られながらトントンと階段を降り、裏口から店の厨房へ。狭いながらも小奇麗なそのスペースでは、ヒゲもじやの大男が豪快にフライパンを振るっている。博美の父親は……なんだか怖そうだ。

「お父さん、ゴロちゃんお店に出していい？ 怖がったら引つ込めるから」

「ああ、任せる」

生返事をしながら、厚切りの肉にワインを振りかけ火をくべる。

ゴウツと高く立ち上る炎に、俺は首をすくめた。喫茶店という看板だが、どうやらしっかりした洋食屋のようだ。

「今日は週末だし、本当言うと猫の手も借りたいくらい忙しいの。だから、大人しくしててね？」

「にゃあ（分かった）」

「うん、良い子ね。でも一応、首輪とリードつけるからちょっと我慢してね？」

「にゃ？（首輪？）」

初めての首輪プ……首輪タイムは、なかなか屈辱的だった。店の片隅で『一日看板猫』になった俺は、常連客に「へえー、タマちゃんの子どもかあ」と、かわるがわる抱っこされ、ぐりぐりと頭を撫でまわされた。最初は『立派な招き猫にならねば』と頑張って愛想を振り撒いていたものの、最後は幼稚園児のガキンチョに追い回され……俺は尻尾を丸めてホールから逃げだした。紐の届く限界まで。

ああ、俺は『猫カフェ』じゃ働けない……そんなシヨボイ記憶もゴローへの手土産となった。

\*

「ゴロちゃん、ゴメンね。すっかり遅くなっちゃったね」

夜の昇り電車はことさら人気が少なく、乗り下りする客も無いまま幾度もドアが開閉する。今夜は少し冷え込むようで、車内は冷房がキツイ。ドアが開くたびに、生温い熱気が入り込んでくるのが心地良い。

薄手の半袖セーター姿の博美は、俺を入れた籐カゴを膝の上に乗せ、誰も居ないボックス席で吐息を漏らした。肌寒いのか、両腕で自分の身体を抱きしめるようにしながら。

何駅か過ぎたあたりで、博美は通路の方へ目を向けた。周囲に他の客が居ないのを確認すると、震える小さな声で話し始めた。俺に聞かせるフリをした、独り言を。

「ねえ、ゴロちゃん聞いて。タマはね、乳がんだったんだ……まだ若かったから、進行が早くて……」

「そっか……」

「タマは、私が中学生の時に拾ってきたの。ずっと一緒だったのに、病気になってたこと、気付いてあげられなかった……でも、気付いたときはもう遅くて、手術も無理だった」

もっと抱っこしてあげれば胸のシコリを発見できたかもしれない、食べさせた餌が悪かったんじゃないか、そもそも家の中で飼っていたら、避妊させていれば……博美の懺悔はループしていつまでも繰り返される。俺はにやあと微かな鳴き声をあげ、籐カゴを内側から引っかいたけれど、博美の耳には届かない。

「最近、急に具合が悪くなったの。お父さんたちは仕事があるし、私が毎日病院連れて行って、点滴してもらって……最期くらい、面倒みてあげたいと思ったんだ。この一年ほったらかしてきちゃったから」

「博美……」

「私は、ヒデちゃんとゴロちゃんに、逃げ場を求めてたのかも。タマが苦しいのに何もしてあげられない分、二人に何かしてあげることで、罪滅ぼしになると思ったんだ。現実逃避ってヤツ。そんなことしても何も変わらないのに、バカだよ……でも、大好きなご飯

も残すようになって、どんどん痩せてくタマを、見てられな……っ  
く……」

カゴの網目から、博美の顔が見える。いつもの笑顔は消え、大きな瞳からはぼたぼたと透明な涙が零れていた。初めて見る博美の涙に、俺の胸はズキンと痛む。

「泣くなよ。博美のせいじゃない……」

「それにしても、さっきのヒデちゃん冷たかったな……一応今日も何回か電話したんだけど、出てくれなかったし……私、もう嫌われちゃったかも……」

俺のせいかつ？

目の前には、しゃくりあげるのを必死で堪える博美。俺はヒゲをびくびく引きつらせながら叫んだ。

「嫌ってなんかいないよっ、それは酔っ払ってただけで……っついてい  
うか、アイツはゴロー！俺はここにいるよ！」

「ゴロちゃん、シーッ！」

はい、スミマセン……。

シユンとうなだれる俺に気付いた博美は、「良い子良い子」と囁いて優しく笑みを漏らす。泣かれるより、そっちの方がずっといい。「あーあ。ヒデちゃんにも最初から、タマのこと相談しておけば良かった。一回ね、言おうと思ったんだよ。でもヒデちゃん、試験のことで落ち込んでたでしょ？ヒデちゃんの前では元気な自分を見せていたくて、つい見栄張っちゃったんだよね。一回言いそびれたら、なんだかどんだん言えなくなって、結局無理してるのバレちゃっ  
つて……でもまさか、浮気だなんて……」

再び声を詰まらせる博美。自分のバカさかげんが情けなくて、俺は涙が出そうだった。

博美と初めてケンカしたとき、俺は珍しくストレスが溜まっていった。自分の苛立ちを吐き出したかった。そのために、博美を利用してしまった。

博美の様子が急におかしくなったこと……特に、家に泊まってい

く日が減ったことを訝しんで、つい「浮気してるんじゃないか？」なんて口走ってしまったんだ。

博美が、辛い時も気丈に振る舞う女の子だっことは、誰よりも良く知っていたのに。

どうしてもっと、博美のことは見てあげなかつたんだらう？

自分の気持ちしか見えていなかった俺は、本当に子どもだった。ようやく気付いたのに、今の俺は謝ることも彼女を抱きしめることもできない、ただの子猫でしかない……。

「でも、もういいや。私、ふっきれたよ」

「ひ、博美……？」

さっきまで沈んでいたのが嘘のように、妙に明るい声色。怯える俺の尻尾がぷうつと太くなる。

この展開……まさか、まさか別れを……。

「人間だつて、いつまで生きてられるか分かんないだもん。後悔するようなことしちゃダメだつて、タマちゃんに教わった気がする。だから……今さら遅いかもしれないけど、私ヒデちゃんに全部話すよ。やっぱり、ヒデちゃんのこと大好きだから」

「博美いつ！俺もお前のこと大好きだー！」

「ゴロちゃん、シーツ！」

「あ、はい……」

「でも、聞いてくれてありがとう」

博美は一瞬カゴの蓋を開き、俺の頭を撫でた。涙でぐしょぐしょな、痛々しい笑顔で。

濡れたその頬へ手を伸ばしかけたとき、パタンと閉じられた蓋。それから博美は何も言わず、窓枠に肘をつけて外の景色を眺め始めた。

ガタンゴトンと心地よい揺れが続く電車の中で、睡魔にとらわれた俺はいつしか眠り込んでいた。

\*

目を覚ますと、俺はまだ籐力ゴの中に居た。

「あつ、起きた？ ヒデキ君」

「ゴロー……」

どこまでが夢なのか良く分からないまま、蓋を開けられ外に飛び出した俺は、尻尾をツンと立てて大きな欠伸をした。顔を何度かこすると、ようやく目が覚めてくる。

「あれ、博美は？」

「キミを置いてすぐ帰ったよ。明日また来るってさ」

「何か言ってた？」

「うん、何か言いたそうにしてたけど、もう遅いからって帰らせたんだ」

「そっか……」

柱時計を見上げると、時間は深夜一時だった。ゴローは昼間酔っ払って寝たせいか、まだテレビをつけている。欠伸を噛み殺しているところを見ると、もしかしたら俺が起きるのを待っていたのかもしれない。

「ゴローあのさ、今日博美の家で俺……」

「そうだ、お腹減ったろ？ ヒロミがキミにとってお土産をくれたよ。最高級の“ご飯”だって」

「うにゃっ？」

こんなのボクも食べたことないのにとぶつぶつ言いつつも、ゴローが小さなアルミパッケージを摘んで引き裂く。袋が開けられた瞬間……俺の心を覆っていたセンチメンタルな想いは吹っ飛んだ。

「うにゃにゃーっ!!」

「うわー、さすがだねえ。CMの通り“猫まつしぐら”だ」

むちゃむちゃと音を立て、肉汁の滴り落ちる最高級レトルト猫餌を食べながら、俺はいろいろ悩みが全て消え去っていくのを感じていた。

そうだ、俺はこうして生きている。五体満足で、美味しいものを食

べて、好きなだけ寝て……それが最高に幸せってことなんだ。

この幸せをくれた、全ての存在に……なにより、この“ご飯”を  
開発してくれた人に感謝を！

## 「グルメ猫・その6」(後書き)

解説&作者の言い訳(痛いかも?)です。読みたくない方は、素早くスクロールを。

前回のシリアスモードを少し引きずりつつも、立派に立ち直った二人(一人&一匹?)でした。やっぱり身近な人やペットの死って大きいです。そのままの自分じゃいられないって気持ちにさせられます。なーんて……この話、いつたйдこのカテゴリなんでしょう。一応ファンタジーだし、コメディはコメディなんだけど、ラブ要素は薄めだからラブコメじゃないし、ちょっと成長「青春要素もあるような気が。何にせよ、ちょっとイイハナシを書きたかったのですが、読者の皆様にとってはいかがでしょう……びくびく。薄っぺら過ぎて感情移入できなかつたらすみません。今回の作者イチオシポイントは、博美父です。大好きなヒゲの大男キャラを出してしまいましたっ。ああ、フランベされたい……(ヘンタイ)。あとは、猫カフェ。皆さん行ったことありますか? 自分は一回だけあります。休日の夕方だったせいか、猫ちゃんたち皆ぐったりしてました。見

たこともないような、超ゴージャスウー（by杉本彩）な猫じやらしにも見向きもせず……うう。行くなら開店直後が狙い目です。

次回は最終日。お約束通り、御三家メンバーが揃っての大団円で。ここ一回影が薄かったゴローのリベンジにご注目を！

## くグルメ猫・その7

7・五日目・昼。 / 五日目・夜。 / 翌日。 (最終話)

猫生活、最後の朝がやってきた。

柔らかなベッドの上で、クカアツと大口を開けて欠伸。再びシャッターを下ろそうとする瞼を必死で持ち上げ、俺はぶるぶると首を横に振った。今日はさすがに朝寝坊などしてられない。

四本足をバネのように弾ませて机に飛び乗り、カーテンの裾を啜え勢い良く引つ張る。窓から差し込む真夏の光を全身に浴び、体内時計をリセット。眠気覚ましにと、寝室を何往復かダッシュする。

俺の足音に気付いて、ゴローがやってきた。今日も朝から家事をしていたのか、Tシャツの上にエプロンをつけている。

「おはよう、ヒデキ君。今日は珍しく早起きだね」

「ああ、今日くらいはなっ」

威勢良い俺の返答に、ゴローはクスツと笑って言った。

「ボクの間人修行も今日でおしまい。早かったなあ。最後は“旨味”だけ……なんかお勧めの食べ物ってある？」

「ちよつとその前に、質問していいか？」

俺は右手を上げてちよいちよいと動かす、招き猫のポーズでゴローを呼ぶ。昨日博美の店で、老若男女を骨抜きにしたしぐさだ。

「なんだい？ ヒデキ君」

「なあ、俺たちこの先どうなるんだ？ 身体は元通りになるとして……記憶の方は。この五日間のこと忘れちゃうのか？」

「んー、それはボクにも分からないよ。なんせ初めての経験だからさ。ただ、覚えていたとは思っただけだね」

その返答を聞きしばし迷った末に、俺は昨日の出来事をゴローに伝えることにした。

床からベッド、机と三段跳びでジャンプし、猫背をなるべくピン

と伸ばした姿勢で、俺はゴローを見つめる。ヒゲを剃ったばかりのこざっぱりした俺の顔が、不思議そうにコクンと横に傾く。

「どうしたの？ 何だかかしこまっちゃって」

「あのさ、ゴロー。落ち着いて聞いて欲しいんだ。実は俺が昨日、博美の家に連れていかれたのは……」

「うん、分かってるよ」

驚いて猫目を丸くする俺に、ゴローは両手を伸ばした。俺がしがみつくパターンじゃなく、初めてのゴローからの抱擁だった。

ふわりと高く持ち上げられても、馴染みのある感覚のせいかわくはない。案外嬉しいその腕に身を任せながら、俺は昨日のゴローの様子を思い出す。

俺がどんなに止めても、ゴローは酒を飲みたがった。博美の家から帰ったときもぼんやりテレビを見ながら、眠たげに目を何度も擦っていた。あの赤い目は……。

「ヒデキ君、ママのこと見送ってくれて、ありがとう」

「っ！」

反射的に、俺はゴローを見上げた。

敏感な猫耳が、ゴローの声だけでなくその意志までもをキャッチする。それは昨夜電車の中で聞いた、博美の決意と同じものだ。辛い現実を受け入れて、乗り越えた者の声。

俺はゴローの頭を撫でてやりたかった。けれど、残念ながら今の俺では『招き猫』のポーズが限界。かろうじて届いた頬のあたりを、肉球でふにふにと押してやる。ゴローは気持ちよさげに目を細める。「なあ、ゴロー……タマはお前に『立派な猫又になれ』って言ったよ」

「全くママは心配性なんだから。ボクはもう小さな子どもじゃないのに……」

間髪おかずに返ってくる憎まれ口が、やけに心強く感じる。俺はよしよしとうなずいた。

ゴローは、大丈夫だ。

「あとさ、ゴロー。俺、博美の家族にも遺言頼まれたんだよ。『この家に飼われて幸せだった』って。それは絶対忘れたくないんだ。だから今のうちに紙に書いといてくれないか？ 今日博美も来るっというけど、できれば俺の口から上手く伝えたい」

「うん、分かった」

ゴローは俺を机に降ろし、ふせんメモを一枚めくった。机に向かい、俺が言った通りの言葉を書き記し始める。

「もし記憶が消えてても、変なイタズラだと思って捨てないでね？」

「さすがに自分の筆跡なら大丈夫だろ。あ、その上に『博美の家族へ タマの遺言』って入れといてくれ」

紙の上で、ヘタクソなミミズ文字がするすると綴られ……不意にストップ。

「ゴメン、ヒデキ君。キミのとろけるプリン並な脳ミソには、ゆいごんって漢字が登録されてないみたい」

「……じゃあ“伝言”で」

\*

完成したシンプルな遺言メモ。無くさないように机の上のノートパソコンに挟み、念のため同じことをパソコンデータでも入力。

作業が終わると同時に俺とゴローは脱力し、ベッドの上に座り込んだ。珍しく神妙な面持ちで、ゴローが話しかけてくる。

「ヒデキ君……ボクからも“伝言”があるんだ」

「どーした？」

肉付きの悪い太ももの上に飛び乗り、俺は真上にあるゴローの顔を見つめた。何か大事なことを言おうとしている気がして。

「ボクたち猫は人間より少しだけ寿命が短いけど、その分精一杯、悔いが無いように生きてる。だから万が一……ボクに何かあっても、あんまり悲しまないでね」

「おいおい、縁起悪いこと言うなよっ」

「ふふつ、そうだね。ゴメン」

そう言って、ゴローはでかくてゴツゴツした手で俺の頭を撫でてきた。博美の柔らかい手も好きだけれど、このちよつと乱暴な手も悪くない。耳から背中へと何度も毛を梳くように動かされるうちに、自然と喉がゴロゴロ鳴り始める。

「もちろんボクは絶対猫又になって、誰よりも長く生きるつもりだよ。そして母さんのことも、ボクを育ててくれた人たちのことも、一生忘れない。孫子の代まで守ってやるんだ」

力強い眼差しで断言するゴローを見上げながら、俺は思った。

ゴローと入れ替わるまでの三日間、俺は嫌な事から目を伏せ耳を塞いで……生きながら死んでいた。

そんな中、俺の知らないところで必死に生き抜こうとする命があった。消えゆく命を繋ごうと努力する人たちがいた。その事実を、俺は朝日の中で噛み締める。

「しかし、猫ってスゴイよな……」

人生八十年といわれる中、ハタチの俺はまだ親の脛をかじる子でもしかない。それに比べて、猫は生まれてすぐに自立し、たった一年で大人になる。もう十年も経てば、ゴローも立派な還暦のじいさんだ。

コイツがいつ猫又に変身するのは分からないけれど……。

「俺も、出来る限り見守ってやるよ。お前が立派な猫又になるところをさ」

「ボクが猫又になるなんて、そんなの……当たり前前のクラッカー？」

「ハハツ、なんだその古いギャグは」

「これはヒデキ君の脳ミソから拾ったんだよ？ いつも言いたくて言えない、恥ずかしい親父ギャグコーナーから。漢字は覚ええないのに、こういうことは覚えてるんだよね」

ゴローの皮肉にカチンと来た俺は、ふざけ半分で爪を立て飛び掛ける。ゴローも狐の形を作った手で応戦する。素早いカウンター猫パ

ンチをスイツと避けるこしやくな狐。俺が「フシャーッ！」と叫んで、狐の喉元に甘噛みをしかけたとき。

『ピンポーン』

俺とゴローは顔を見合わせた。

「おい、ゴロー。大事なこと言うの忘れてた。お前、博美と会ったら真っ先に謝れよ？」疑ってゴメン』って」

「えー、ボク何にも悪いことしてないのに……」

「いいからっ！ そしたら明日、最高級レトルト猫餌買ってやるっ！」

「ホント？ 何日分っ？」

「……分かった。俺の小遣い残り全部つき込んでやるから」

ここそそと密約を交わした後、ゴローは玄関のドアを開けた。そこには、少し腫れぼったい目をした博美が、昨日とは違う本来の笑顔で立っていた。俺とゴローは、その眩しい笑顔に一瞬目を奪われる。

「ヒデちゃん、ゴロちゃん、おはよっ！ 今日カレー作ってあげるね！」

博美は、真っ先に「ゴメン」と言うのかと思った。

先にその言葉を言わせたくなかった。

でも……博美の笑顔でようやく気付いた。言葉なんて必要ないんだって。もうとつくに、俺たちは仲直りしてたんだから。

博美の生足に頬ずりしながら二人の絆の強さを噛みしめる俺に、ふっと影が差した。いつの間にかゴローが、博美に接近していた。

「おはよう、博美」

ゴローは低く通る声でそう囁くと、大きなビニール袋をぶら下げた博美に手を伸ばし、軽々とそれを取り上げる。横で見ている俺にも信じられないくらい優しげな笑みを浮かべて。博美は顔をぼわんと赤くしてゴローを見つめている。

そして……猫にしては賢すぎるゴローは、俺の想像を超える台詞を言った。

「俺も手伝うよ。あとケーキも用意してあるから……今日は俺たちの“一周年”記念日だもんな」

俺はリビングに駆け戻り、柱時計の下にぶら下げたカレンダーを見上げた。

博美が「今度一人で遊びに行つていい？」の言葉を実行した、その日が来ていたのだ。

\*

ゴローにとつても記念すべき、人間生活最終日。

旨味を求めていたゴローは、博美の親父さん直伝『ふるさと欧風カレー』に舌鼓を打った。何杯もお代わりしては「美味しい」を連発し、博美を無駄に喜ばせる横で……俺は一人カリカリをむさぼった。ゆっくりめの昼飯が終わった後、博美は勝手知ったる様子で湯を沸かして紅茶を作り、ゴローはその隣で、今朝こっそり仕込んだというデザートのアチーブケーキを切り分けた。

立ち上る紅茶の湯気とチーズの香りに包まれながら、タマの思い出話を幸せそうに語る博美。

柔らかな微笑みを浮かべながら、静かに聴いているゴロー。

扇風機の風を受けながら、ソファの上に寝そべり少しだけまどろむ俺。

そんな穏やかな時間は、唐突に終わった。

「ヒデちゃん？ どしたの……？」

柱時計が二時の鐘を鳴らす。足元ではゴローがニヤアと鳴く。

俺は大きく深呼吸しながら、静かに目を開けた。最初に見えたのは、空っぽのケーキ皿と冷めた紅茶。チェックのランチョンマットを辿った先には、もう一対の食器。その向こうには……。

「……ああ、博美」

俺は椅子から立ち上がり……博美を力いっぱい抱きしめた。

## 五日目・夜。

博美は、久しぶりにうちへ泊まっていった。

手を繋いでスーパーへ買い物に出かけ、夕飯も二人で手料理を食べた。そして仲直りのニヤンニヤン……の後、俺は博美に「疑ってゴメン」としっかりと言葉で謝った。

小さなシングルベッドに寄り添い、博美の艶やかな髪を撫でながら、俺は話してきかせた。『猫又は本当に居るんだ』って、嘘みたいなホントの話を。さすがにありのままを話すのは突拍子も無さ過ぎるから、『ゴローと入れ替わったのではなく、ゴローのテレパシーを受けただけ』という、半分フィクションの設定にしておいた。

博美は最初「嘘だあ」と笑い飛ばしたから、俺はいたずらっ子のようにフンと鼻で笑ってみせた。

「証拠もしっかりあるんだ。そのノートパソコン開けてみな？」

当然、出てきたメモの内容に驚く博美。

「もうっ、ヒデちゃんのいじわる。私のこと騙そうとしてっ。これ、私がおトイレ行ってる間にこっそり書いたんじゃないの？」

「ったく、疑い深いなあ。だったらノーパソの電源も入れてみるよ」  
ノロノロと起動するパソコンを、頬を膨らませながら睨む博美。

俺が密かに「恥ずかしいデータを隠しておいて良かったー」と胸を撫で下ろしていることにも気付かず、博美は例の遺言データを開き……その作成日時を見てポツカリと口を開けた。

最後は観念したのか「信じられないけど、それが本当だとしたら、すっごく素敵！」と顔をくしゃくしゃにして笑った。

翌日。

博美は明け方にそっと帰り、二度寝した俺は昼過ぎに目覚めた。いつも通り……ゴローの強力な猫パンチで。

とりあえずシャワーを浴びてさっぱりし、パンツいっちょでリビングへ。ニヤアニヤアと足元にまとわりつく茶色い子猫をひょいと抱き上げ、俺はそのふわふわな頬にキスをした。

「ゴロー、恋人は博美だけど、お前のことも愛してるぜっ！」  
「フニャーッ！」

「……はいはい。“ご飯”だろ？ お待たせしましたっ」と  
相変わらずつれないリアクションに苦笑しつつ、俺は昨夜買った“まつしぐら”な餌を小皿に盛り付ける。俺の手を押しつけるように鼻面を割り込ませ、息もつかずに夢中でがつつくゴロー。

「おいおい、そんなに慌てて食べて、後で吐くなよー」  
上機嫌で一声かけ、俺はワクワクしながらキッチンへ。

昨日の昼に博美が作ってくれたカレーの残りは、一晩冷蔵庫で寝かせてちょうど食べごろだ。レンジで冷凍ご飯を温め、冷蔵庫から取り出したカレー入りの片手鍋を火にかけた。

リングとはちみつを隠し味にした博美のカレーは、まさに芳醇な香り。鍋の上で鼻の穴をめいっぱい広げ、その芳香を堪能しながら俺は明け方に聞いた「夏休みは毎日来るね。ていうか、ここにしばらく住んじゃダメかな？」の台詞を思い出し、ニヤついていた。

「昨日は食べ損ねちゃったからなあ……まあ、またいつでも作ってもらえるけどなっ」

熱々の具だくさんカレーを皿に盛り、テーブルに移動。満を持して、湯気の立つこってりしたカレーを一すくい……。

「うっ、美味いっ！」  
あまりの美味さに感動した俺は、固い繊維質の何かを舌でキャッチしたものの、そのままゴクンと飲み込んでしまった。

その瞬間……木目のテーブルも、白いカレー皿も、銀のスプーンも、視界から消えた。

唖然とする俺の耳に、聞き慣れた『俺の声』が届く。

「おめでとう！ 猫ヒゲ一本で、なんと四泊五日の猫体験ツアーにご招待！」

「アホかつ！ 早すぎるわっ！」

「さて、今度は何を食べようかなー。よし、とりあえず一晩寝かせて美味しくなったこのカレーを食べよつと」

「それは俺のだっ！ この泥棒猫っ！」

「まあまあ、また一口おすそ分けしてあげるから、ね？」

「うわぁあんっ！ ゴローのバカアアツ……」

（おしまい？）

## くグルメ猫・その7（後書き）

解説&作者の言い訳（痛いかも？）です。読みたくない方は、素早くスクロールを。

ということ、お約束なアホアホ最終回でしたっ。ご満足いただけましたでしょうか？ ドキドキ。途中まではかなりシリアスで、最後は人生のこと語っちゃったりとイイハナシーサー的になったり、その後博美を抱きしめたところで終わっておけば、それなりに素敵なラブストーリーに……しかし、そうは問屋が卸しません。最後は『ゴロー賢い&ヒデキアホ』なオチで終わらせたくて。結局ヒデキ、カレー（バ モントぢゃないよ）一口しか食べられず。でもニヤンニヤン（これは全年齢イケるよね？）なんてイイ思いしてムカツクので良いのです。さてこの話にはいろいろ隠れ課題がありました。一つは『猫にまつわる言葉・慣用句』をいくつ盛り込めるか？ ということでした。また、オチへの伏線もいくつ仕込めるかなとチャレンジ。最後の猫ヒゲについては、一日目のお風呂直後に。入浴後にヒゲがもげて（といっても、抜けかけだったヤツですよ。タオ

ルで擦ったくらいじゃもげません）、それをコロコロで回収。手料  
理を覚えたのも、クリームチーズを買い込んだのも……それ以前に  
タマの死も予期してたり、仲直りも察して一周年記念日まで……こ  
んな賢い弟系キャラ（一人称はボク）が好きだー。猫又ラブ！と、  
この話はひとまずここでオシマイですが、いずれ続編書きたいです。  
入れ替わる二人と協力者博美の御三家で、何か事件解決していく感  
じの……なんて絶賛妄想中。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0481z/>

---

四泊五日グルメな子猫ちゃん体験ツアー

2011年12月7日06時27分発行